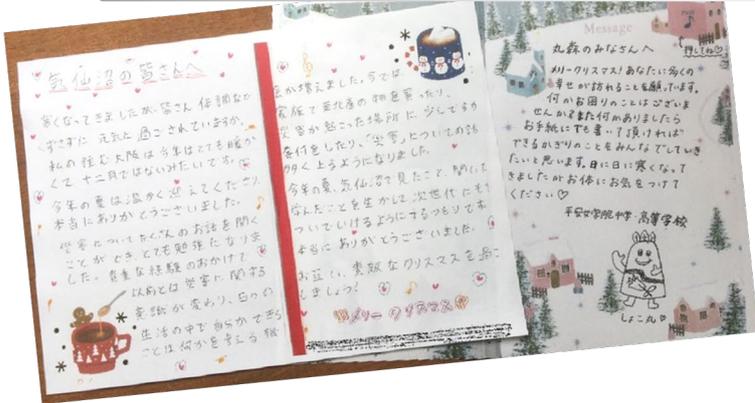


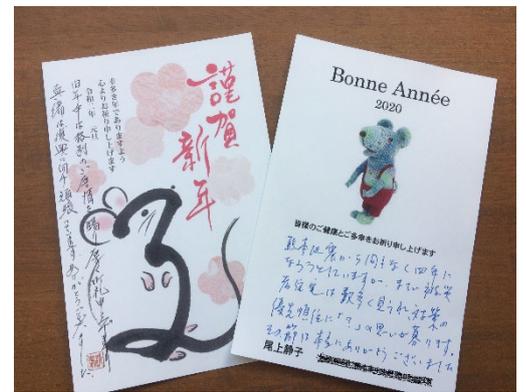
# 轍わだち

2020. 1. 11 NO. 118



## 被災地（気仙沼市・丸森町）に クリスマスギフトを届けました！

皆様のご協力で得られた募金をもとに、今年も宮城県の被災地にクリスマスの贈りものを届けることができました。夏に訪問できた気仙沼市鹿折地区、台風の浸水被害を受けた丸森町の方々に向けて体を温めるものやバッグや文具入れなどの手作り品を送りました。それぞれ大変うれしかったと電話や、感謝状をいただきました。



東日本大震災で発足した委員会ですが、今まで支援助物資を送った倉敷市真備町、熊本市の方々からも近況を記した年賀状を頂きました。先輩らが支援した活動をこれからも繋いでいきたいと考えています。

- 【贈り物の内訳】 ・カイロ 240 ・ヒートテック：シャツ 14・パンツ 8  
 ・WATER CRESS ハンドメイド：レッスンバッグ 6、テニムポーチ 13、テニムがま口 6、テニム巾着 3、  
 ペットボトル入れ 7、パンケース 6、ヘアアクセサリ等

平安女学院 中学・高等学校の皆様

丸森町教育委員会教育長 佐藤 純子



令和元年十二月

謹白

謹啓 この度十月十二日から十三日にかけて発生した「令和元年台風十九号災害」による丸森町の被害に際しましては、心温まるお見舞いや御支援を賜り、誠にありがとうございます。

本町では、降り続いた豪雨による河川の氾濫や土砂崩れにより、犠牲となる町民が出るとともに道路の寸断や水道管の損傷による長期の断水、土砂の流入や浸水による建物の損傷や倒壊など、かつてない甚大な被害を受ける大災害となりました。

学校関係では、金山小学校の校舎や体育館が床上浸水により大きな被害を受けるとともに、耕野小学校校庭の一部陥没やプールへの土砂流入、華甫小学校プールへの土砂流入、学校給食センターにおいては敷地への浸水による機器の損傷などの被害がありました。

災害発生後は、子どもたちの安否の確認や学校の被害状況調査などで、いつ学校を再開できるか見通しも立たない状況でしたが、被害の大きかった金山小学校は、丸森小学校校舎で授業を再開し、現在、すべての小中学校で通常の授業に戻りつつあります。

皆さまから頂戴いたしました御支援のお気持ちを糧に、子どもたちの心のケアにも十分に配慮しながら、教育委員会と学校とが一丸となって、元の学校活動に戻れるよう取り組んでまいります。

本来なら御支援を頂戴した皆様に直接お礼を申し上げるべきところ、略儀ではございますが、書中をもちましてお礼とさせていただきます。



丸森町からは  
丁寧な感謝状が  
届きました!!

# 25年…阪神淡路大震災

## 1月17日：午前5時46分

阪神淡路大震災から早くも25年経とうとしています。遠い昔のことではなく、「兵庫発」の経験と教訓を次世代と国内外に発信するために、神戸新聞社では6つの提言を掲げ検証してきました。

- ①市民主体の復興の仕組みを確立する
- ②防災省の設立を
- ③「防災」を必修科目に
- ④住宅の耐震改修義務化を
- ⑤地域経済を支える多彩なメニューを
- ⑥BOSAIの知恵を世界と共有

思えばこれらの提言は政治によるリーダーシップだけではなく、平安女学院中学校高等学校の教育にも取り入れられてきました。「あの日を振り返りながら、防災への備えについての意識を高めたい！！」そんな思いで当時の様子を、被災地に実家を持つ末積優司先生に投稿していただきました。

1995年1月17日早朝、これまで体験した事のない揺れで目覚めた。我が家の状況を確認し、情報を得るためにテレビの前で釘付けになった。震源地が兵庫県南部と流れ、すぐに実家に連絡し無事を確認した。しかし、その後はアクセスが集中し電話はつながらなかった。刻々と入ってくる情報で、生まれ育った街の見慣れた光景が、変わり果てた映像に絶句した。

出勤のため家を出たものの、マンションのエレベーターは動かなかった。学校で生徒の状態を確認し、その日の仕事を終えると、実家のある神戸に向かった。水タンクやカセットボンベなど思いつくものを買込み、車に積んで向かったものの、大渋滞で着いたのは夜中だった。外灯も家の灯もない真っ暗街、所々に倒壊した家、人の気配もなく、ゴーストタウンのようだった。

あれから25年、復興により傷跡を残す光景はほとんどない。しかし、被害に遭い、家や街、家族や友を失った人たちの心にはまだまだ深い傷跡がある。

あの時も…支援活動に取り組んできた今井千和世先生にも、当時の様子を聞きました。

早朝からテストの採点をしていた私は、娘たちの「お母さん」と言う叫びに「大丈夫」と答えながら、ただ事ではないと言う予感でテレビのスイッチを入れた。刻々と被害の様子が知らされていくがまだあれほどの被害を予想できない状態のまま出勤した。教室の壁のひび割れを目にしながら、日を追うごとに、親戚が被災した・叔母がなくなったなど生徒の声を聞く日々が続いた。支援物資を集める教職員。被災地にバイクで支援物資を届ける教職員に混じりながら、避難所の体育館に出かけて、たこ焼きを焼くボランティアにクラスの生徒たちと出かけたのはあの日から3週間後であった。寒さの中に長い行列ができた。小さな子供が「もう一回並んでもいい」と問い返してきた時、堪えていた思いが思わず涙となってしまう、作り笑いで涙を精一杯こらえたことが思い出される。